縁側に託す想い

長谷川　綾

私の両親は、ベトナム人だ。ベトナム戦争が終結した数年後の一九八〇年代初頭、母は小型のヨットに弟と身を寄せて、あてもなく漂流していたという。いわゆるボートピープルだ。はっきりとした日付感覚が失われていく中、ようやく一隻の外国船によって救助された。その時にはすでに食料が底をつき、自身の伸びた爪をかじって空腹を耐え忍んでいたらしい。

父は、別の漁船で日本にたどり着いた。やがて二人は難民の定住促進センターという所で出会い、後に男の子二人と女の子一人、そう私を授かったのだ。

私の幼少期は、明るく希望に満ちたものでは決してなかった。両親はセンターを卒業したものの、たった数ケ月で日本語が流暢になるはずもなく、まずは言葉の壁にぶつ

かった。そのことによってもたらされる就職難、そして貧困。父がパチンコやお酒に溺れたのち、家族に手をあげるまでに時間はかからなかった。さらに一番上の兄の発達障害が発覚してからは、兄も家族に手をあげるようになり、私の人生の「どん底」は全て幼少期に味わったのではないかと思ったほどだ。

学校でもいじめの対象になり、家にいても安らぐことが出来ず、居場所がどこにもなかった私の唯一の楽しみは「妄想」だった。

当時住んでいた町営住宅には縁側（濡れ縁）があったため、どんな天気の日も私は縁側に腰を掛け妄想に耽った。

日本人に産まれてきたこと。

両親が仲良く、お金に困らない家庭であること。

兄が障害を患わず、兄弟仲が良いこと。

いじめられずに学校で堂々としていられること。

少し欲張って、人気者になり男の子から告白されること。

私は現実逃避をするかのように、来る日も来る日も明るい妄想で胸を弾ませていた。

やがて父と母は離婚した。私たち兄弟は母に引き取られたが、生活が一転することはなかった。

そしていつの日からか、自分の妄想をノートに書き綴るようになった。中学生になった頃、妄想の中の「私」は大人になっていた。

歌手を夢見て上京し、一躍大スターになるという夢物語だ。裕福な家庭に生まれ、お洒落で可愛くて、人気者の女の子。そんな主人公をもとに、私の妄想は膨らむばかりだった。

「お前、何書いてんの?気持ちわりー。」

急な大声を出したのは、当時私をいじめていた主犯格の男の子だった。ノートは瞬時に取り上げられ、次々にクラスメイトの手に渡り、笑い声や憐れむ声が教室中に響いた。

「これ、お前のこと?お前がこんな人生送れるわけないだろ。」

誰かがそう叫んだ。恥ずかしくて消えてしまいたい衝動にかられた私は、教室を飛び出し、自然と昇降口へと向かった。上履きから外靴に履き替えることもせず、学校を後にした。目的地もあてもないまま、ただひたすら歩き続けていた。

そのまま数キロ離れた隣町にたどり着いた。白昼堂々、体操服で上履きのまま県道を

歩く姿は、周囲の目にどのように映っていたのだろう。そんなことを気にすることもなく、私はある一軒家の前で足を止めた。

平屋の木造家屋。道路に面した建物の中央には玄関があり、その左右には縁側が設けられていた。なんの躊躇もなく、私は玄関の横にある呼び鈴を鳴らした。

「はい？」中から出てきたのは母と同じくらい、もしくはそれ以上に歳を重ねてきたようにも思える白髪の女性だった。女性は怪訝そうな表情を浮かべ、私を見つめてきた。無理もない。知り合いでもない中学生が、こんな昼間に何のようだ、と誰でも思うはずだ。途端に頭が真っ白になり、私は咄嗟にこんな事を口にしていた。

「学校の家庭科の実習で、家のご飯を食べさせてもらって味を勉強する、ということをやっているんです。良かったらご飯を食べさせてもらえないでしょうか。」

もちろん嘘に決まっている。時代に関係なく、こんな見え透いた嘘が大人に通じるわけがない。たった一人で他人の家の呼び鈴を鳴らし、図々しく食事を頂こうなんて、常識外れを通り越し、度胸があるな、と当時の私を関心してしまうほどだ。

「ごめんなさい」。断られると思った私はそう言い、その場から離れようとしたが、女

性は何かを考えたあと「どうぞ」と私を家の中に入れてくれたのだ。

八畳ほどの和室に案内された。大きなガラス戸には上下にスライドされた猫間障子が組み込まれており、ほどよく外気が当たっていた。部屋の真ん中には高さ五十センチほどの、丸い木のテーブルが置かれていたのを覚えている。

「こんなもので良いのかしら」。そう言ってお盆に載せた茶碗たちを、私の前に差し出してくれた。お味噌汁に温かいご飯、豚肉と茄子の炒めもの。食後にと、杏仁豆腐もつけてくれた。私は堪らず泣いてしまった。嗚咽を漏らしながら、声にならない声で呟いた。

「いただきます」。その後は黙々とご飯を頂いた。何一つ、お米一粒残すことなく、完食した。とてもとても、美味しかった。温かい味が口一杯に広がった。その様子を、女性は何も言わずにただ見守ってくれていたように思う。

「辛いんです」。茶碗が片付けられたテーブルを見つめながら、聞かれてもいないことを私は語り始めていた。自分の今までの境遇、兄や学校でのこと。泣きながら話していたため、うまく話をまとめることが出来なかった。そしてふと、我に返った。私は学校

を抜け出し、他人の家で一体何をしているんだろう、と。同時に申し訳ない気持ちが込み上げてきた。

「ごめんなさい」。ここに来て二度目のごめんなさいだ。小さく呟く私の傍らで、女性は静かに頷いた。

「負けないで」。

気付くと、女性に両手を握られていた。強く、強く、握られていた。

それからすぐに、女性の自宅に警察が来て、私はあっけなく保護された。警察署で事情を聞かれ、夕方にはパトカーで送迎してもらい、自宅に戻っていた。こうして私の「プチ」脱走劇は、その日のうちに幕を閉じたのだ。

それ以降、両親の脱走劇はどれだけ悲惨なものだったのか、と考えるようになった。いつ荒波で船が転覆するか分からない、いつ助けてもらえるか分からない恐怖に怯えながら、空腹に耐える日々。私の経験した「プチ」脱走劇なんて比ではないな、と思えた。

そんな中でも人から貰った温かい優しさは、生きる希望へと変わるんだ、と改めて実感できた。この異国の地でも、両親に温かく優しい手を差し伸べてくれた人々が、きっ

といたのだろう。

あれから二十年もの月日が経った。私は帰化をし、日本国籍を取得した。結婚もし、一児の母となった。

あの女性には、あの脱走劇以来会っていない。見知らぬ中学生に食事を提供してくれた女性。たった数時間を共にした、名前すら分からない女性。だけど確実に私を救ってくれた女性。私が訪れる前から、彼女もあの濡れ縁に腰かけ、何かの想いに耽っていたのだろうか。

今現在もなお、世界各地で紛争が起きていて、両親が経験したように、戦地の人々は必死な思いで自国から逃れようとしている。

そうして生き抜いた先には、私のように難民二世が誕生する日が来る。私の子供は、難民三世となる。

いつか二世や三世の子供たちも、自分のアイデンティティに悩む時が来るのかもしれない。戦争の悲惨さを実際に目の当たりにした訳ではないけれど、きっとこの先、理不尽なことで涙を流す時が来るかもしれない。

そんな時は静かに「妄想」してみよう。

明るい未来、明るい人生、明るい自分。

「妄想」は「希望」に変わり「未来」に繋がるということを信じ続けよう。両親の生き抜いた証が自分であるという事に誇りを持とう。

未来の子供たちへ。そして今この瞬間も自国のため、家族のため、生き抜くために闘う全ての人たちへ。

「負けないで」。

私はというと、変化があった。まずはベトナム人である自分と、この国で育ってきた日本人である自分に誇りを持てるようになった。次に、幼少期のような妄想は一切しなくなった。残念ながら歌手にはなれなかったが、また縁側に腰かけ、明るい未来を見に行きたい。